H. F. Peters: *Lou. Das Leben der Lou Andreas-Salomé*

杉浦　博

アメリカのドイツ文学・比較文学研究家 H. F. ペータースの著書 "My Sister, My Spouse: A Biography of Lou Andreas-Salomé" (Norton & Company, New York, 1962) が，著者自身の手でドイツ語に移され，伝記類の出版に力を入れている Kindler 社から出された (1964)。オリジナルの英語版は同じ内容のものが 1963 年にロンドンからも出版され，それをもとに土岐恒二氏による邦訳がある (「ルー・サロメ，愛と生涯」筑摩書房，1964)。ドイツ語版は原書の忠実な翻訳ではなく，かなり自由な改訂や削除をふくんだ増補版である。著者自身ドイツ語版のあとがきでその点にふれ，原文に即応した翻訳は非常に困難で，この書物の対象および著者からしてもこの処置が適当だったと述べているが，それはともかく，ルーへの興味を本来いっそう深くもっているにちがいないヨーロッパの読書界にとっては，このドイツ語版の出現は歓迎されるところだろう。増補されている箇所はリルケおよびフロイトに関わる部分にあり，英語版で全 4 部全 19 章であったものが，ドイツ語版では全 5 部全 21 章になっている。著者ペータースは元来ドイツ生まれであり，戦後 Germanic Review や Modern Language Quarterly によってリルケを中心に論文を発表している (たとえば，The space metaphors in Rilke's poetry. 1949; Zum Existenz-Problem bei Rilke und Nietzsche. 1947; R. M. Rilke, Masks and the man. 1960; Rilke's love poems to Lou Andreas-Salomé. 1960 など) が，その仕事の途上，ニーチェやリルケに関係の深いルー・サロメという特異な女性の姿に出会ったのは，むしろ自然のなりゆきといえよう。彼はこの伝記を書くために数年を費やし，まずは 20 冊ほどの著書，100 にあまる評論エッセイの類からなるルーの全作品に親しむことから始め，彼女の死後その遺産の管理者となったゲッチンゲンのエルンスト・プファイファーのもとへ出向き，その監視のもとに未発表原稿や日記の類いに目を通し，さらにルーの知友たちの幾人かに会って彼女の生涯のさまざまな局面を明らかにする知識を得たという。談話から得た情報もかならずもうひとつ別の出所にあたって確認するようにしたと著者は述べているが，そういう彼の努力は，偏見や先入観をできるだけ排した，客観的に納得しうるルーの人間像を描出させることに成功している。従来のルー文献で重要なものは，E. F. Podach の Friedrich Nietzsche und Lou Andreas-Salomé (1937) や，I. Schmidt-Mackey の Lou Andreas-Salomé. Inspiratrice et interprète de Nietzsche, Rilke et Freud (1956) などであり，これらが示すようにこれまでルー・サロメといえば，それはニーチェの愛人としての若い娘であり，リルケの理解者・庇護者としての中年の女性であり，フロイトの解説者としての老女史であって，その姿は生涯の全体にわたる統一像を欠いて，そのときどきの相手の伝記中にそのなかの一挿話として組みこまれているにすぎなかった。近年 (1951) プファイファー編になる自伝「生涯の回顧」„Lebensrückblick" が出されたが，その内容は時間の経過に従わず，主題別に，たとえば神，愛，ロシア，フロイト，といった彼女の人生のいわば基本的な諸経験を多様に提示しているものであり，著者はむしろこの自伝に書かれていないこと

の方に興味をおぼえて伝記を書くつもりになったと語っている。あたかも著者はルーという素材を精神分析にかけて，その潜在意識の深みに沈む真実を掘り起こそうとしているように見える。ここでは，従来ばらばらに寸断され，ときには悪意ある歪曲によってゆがめられ，あるいは世紀の恋人あるいは巫女として神秘のヴェールをかけられたままであったルー・サロメが，その誕生から死にいたる80年に近い生涯（1861—1937）をふたたび与えかえされて，ひとりの人間，ひとりの女性としての全体像においてとらえられている。それは並はずれた知性と並はずれた自然とを合わせもって，社会的倫理的な既成の権威や一定の枠のなかに閉じこめられることを好まずに自己の本然に忠実であり通した人の姿である。彼女は元来著述家であり，前述した通り数多くの小説・評論を書いて当時より有名であったが，今日彼女の名をつたえているのは，ニーチェとリルケについての二冊の卓抜な評論をのぞいて，彼女の創作ではなく，幾人かの男たちとの交友歴である。そのニーチェ論（F. Nietzsche in seinen Werken, 1894）やリルケ論（R. M. Rilke, 1928）が対象の本質をするどくついていることも，彼女が彼らと親しく交わったふれ合いに由るものである。こうしてルーは結局創作の人であるより行為の人であるといえようが，そういう彼女のありかたも，彼女が知性と自然（情熱といってもいい）という矛盾する要素の融合であったことと無関係ではないことがわかるのである。

「肉体の愛から精神の愛の道は通じていないが，後者から前者へはあまたの道がある」とはルー自身の言葉だそうであるが，少女時代のギロートにはじまって，ニーチェの友人パウル・レー，そしてニーチェ，夫アンドレアス，レーデブール，ハウプトマン，ヴェーデキント，スカウエリ，ピネレース，そしてリルケ，ビエレ，フロイト，タウスクから，晩年のケーニヒ，ブファイファーにいたるまで，幾多のしかもいずれおとらぬ第一級の男たちが，彼女の面前に現われ，彼女の知性に魅惑され，そして彼女の情熱に破滅してゆく。彼らにとってルーは，自分たちが成長し，彼らの生の，あるいは学問の，あるいは芸術の，一段と高い階梯に達するための，いわば触媒のごとき存在であった。「彼女と情熱的に接した男は9か月のちに1冊の書物を書く」とさえいわれたという。ところが彼女からみれば，逆に彼らこそ，彼女がおのれ本来の自己を発見し，その独立を獲得し，その自由を保持しつづける過程のそれぞれの時期における触媒の役目を果たしているのである。彼女の関心はつねに自己にあった。いかにして自己が存在の合一を体験して生の根源に接近しうるか，ということが彼女の生涯もちつづけた問題なのであり，彼女がしばしば神や宗教を語り，また性愛の激情を神聖視し，また精神分析に近づいたのも，すべてこのテーマゆえのことなのであった。彼女には自己の生命へのかわらぬ畏敬があった。男たちにとって彼女の魅力のひとつであったように，彼女はつねに生の歓びを感じることができた。それは彼女の生命力，活力の大いさによるものであり，晩年病いにおかされてなお彼女は自然のリズムによせる信頼を失なわなかったという。

彼女は帝政ロシアに生まれ，革命前夜の激動期のロシアに育ち，世紀の転換期を経て，第一次大戦を経験し，やがてナチの擡頭期に死んでいる。彼女が身をもって証した個人の自由の要求と実践は，まさに時代の風潮と一致している。その意味でこの特異の女性もつまりは時代の子であったといえる。ただ彼女は理念だけでなく，行動の人であったこと，これが彼女の特異性を際だたせているのである。たとえば仮想結婚ということも当時のロシアの進歩的な青年たちの流行の思想であっ

た。しかしルーはそれを実際に実行した（レーとの共同生活)。また精神分析への接近も，むろん彼女の資質と深いかかわりをもつとはいえ，一方でそれが最先端をゆく学問であったことにもよるのである。

本書の構成はつぎのようである。序文につづき，本文は全5部に分かたれ，それぞれ第1部「ロシアにおける幼少時代」Eine Kindheit in Rußland, 1861—1880；第2部「鷲と蛇」Adler und Schlange, 1882/83；第3部「野鴨の時代」Jahre der Wildente, 1883—1897；第4部「詩と愛」Dichtung und Liebe, 1897—1901；第5部「魂を求めて」Auf der Suche nach einer Seele, 1901—1937 と題され，それらはいずれも4乃至5の章節に分かたれてそれぞれに小題が付されている。最後に付録として，ドイツ語版へのあとがき，ルー・アンドレアス＝サロメの著作目録，本文中引用の出典，人名索引，目次，がつけられている。

本文の内容を略述すればほぼつぎのようである。第1部では，サロメ家の家系，ルーの誕生，少女時代，牧師ギロートとの出会い，その求婚をしりぞけてのチューリヒ遊学，さらにローマ行が語られる。彼女の父グスタフは長くロマノフ王朝に忠誠をつくすロシアの将軍であるが，もとはロシア国境地方のドイツ語圏に住む一族の出で，さらにさかのぼれば16世紀に宗教上の迫害をうけて祖国を追われたフランスのユグノーだったという。生まれながらのロシア的直観に加えて，汎ヨーロッパ的知性を身につけ，活動の範囲を広くヨーロッパ中にもったルーは，まさにこの血筋の当然の産物といえるかもしれない。同時に，彼女が当時のロシアでは最も西欧化した，それゆえ一種コスモポリタン的な性格の町ペテルスブルクに育ったことも見逃がせない。そのなかに渦まく革命直前の革新的な風潮への共感と興奮を体験していることも大事である。また父の愛をうけ，兄たち三人にまじって幼少期を送ったことは，のちにほとんど男性のなかにのみ友人を見出すことの遠因があろうし，自己中心的な夢想癖は，やがて作家として身を立てる彼女につながっている。長ずるにつれ神を失ない，教会と訣別するが，彼女が生涯追求する「生命の根源」というものは，つまりはこの失なった神に代るものだったといえよう。19 歳の秋チューリヒへ出る契機となるのは，師ギロートとの愛とその終りであるが，彼女にさまざまの学問を授けてその目を世界に向けさせたこの牧師の求婚を拒絶したのは，晩熟の彼女の性に対する恐怖のせいでもあるが，他人の生に巻きこまれることを本能的に拒んでおのれの独立を守り，それによって相手に苦悩を与えるという，その後の彼女の生きかたの原型がすでにここにあるように思われる。

第2部は有名なニーチェとの出会いの時期が主題である。ローマに出たルーはマルヴィーダ・フォン・マイゼンブークの手びきでパウル・レーと会い，彼との共同生活実現の便法にニーチェをさそったところ，逆に求婚されることから事件は生まれる。いわゆるニーチェの「ルー事件」であるが，事実は，ルーにも一半の責任はあるとはいえ，ことの全てはニーチェのひとり合点，ひとり相撲なのであり，つまりは「ニーチェ事件」にすぎなかった。従来ニーチェの伝記などではルーが誘惑者であったが，事実はニーチェの狂人じみた，あるいは人間的な，あまりに人間的なルーへの偏執の引き起こしたことであった，というのである。著者は「ツァラトゥストラ」にみちみちている抑圧された性のイメージやエロチックな暗示にはルーの拒絶にあった怒りの痕跡があるとみているが，ニーチェの場合は，のちのリルケの場合とちがって，ルーによってその思想に本質的な影響をうけることはなかったのではなかろうか。一方ルーは

いわばとばっちりをうけた恰好ではありながら，この体験によって人間の精神の深みへの洞察を深め，創造的な人間のもつ危い平衡，天才と狂人の間が紙一重であることを教えられたことであろう。彼女はやがて最も早いニーチェ文献の一つである「作品にあらわれたニーチェ」を書くことになり，さらに晩年には精神病理学へと向かうのである。著者は，従来のニーチェ伝で不明とされてきたタウテンブルクでのニーチェとルーの生活など，ルーの日記をもとにかなり詳しく再現してみせている。またエリーザベト・ニーチェとルーとの劇的な確執を取扱う際の，両者の内面心理への切りこみ方もするどく説得力がある。

第3部。著者がルーの最も幸福な時代と呼ぶベルリーンでのレーとの共同生活のうちに突然うけた東方言語学者アンドレアスの「ほとんど脅迫的な」求婚と結婚。しかし，彼の妻でありながら終生彼と同衾せず，一つの家に住まいながら夫には代理妻を与えて自分は他の男性たちと自由な，つまり自己にのみ忠実な，関係をもちつづけたことは，この結婚が意に満たない相手の生に思わず巻きこまれたとり返しのつかない行為であったことを示すと同時に，そのなかでいかに彼女が自分に忠実であろうとしたかをも示している。それならなぜ彼女は離婚しなかったか。著者はこの点彼女は夫のなかに保護者としての父の姿をみていたと解している。ルーの求めた知的自由と個人生活の自由は，イプセンの社会劇などに代表される当時の時代風潮の反映でもある。レーデブール，ハウプトマン，ヴェーデキントらはそういった自由探求の道を歩む彼女の前に現われた男性たちである。彼女はヨーロッパのあちこちに旅行し，各地のアヴァンギャルドから「宿命の女」femme fatale として迎えられたが，性や愛について大胆な口のききかたをするルーは，人の妻であり文学ボヘミアンでありかつ 30 歳をこえていまだ処女であり，ようやく自分を肉の世界へ解放してくれる相手を待っているのであった。著者はその相手としてロシア人スカウエリか，一層可能性のある人物としてユダヤ人であるウィーンの医師ピレネース（ツェメク）を想定している。ピレネースはリルケに先だつこと2年前より 12 年ほど彼女の「非公式」の夫だったという。著者はルーと彼との間に，一度妊娠の事実があったものと推定している。

第4部。ルーの名と最も親密に結びつけられるリルケが登場する。著者自身リルケ研究者であることもあって，ことがらとしてのルーとリルケの関係についてはとりたてて新しいことはなにも出されていないとはいえ，両者に公平な客観性のある叙述のうちに，それぞれの心理の動きの追求にはきわめて新鮮なものがある。いまここに詳しくその内容をたどることはできないが，結局，リルケの場合もニーチェのときと同様，ルーは本質的に少しも変ることはなく，もっぱらリルケ事件があるのであり，しかもニーチェのときとちがってその事件はリルケの一生を支配することになるのである。リルケはルーに出会うことによって，幼名ルネをライナーと改めたばかりでなく，また筆蹟がルーのそれに似て来たばかりでなく，ルーによって継続的な仕事の意味を教えられ，心理的に母の支配を脱したのであり，その後のフィレンツェ日記，時禱集，やがては新詩集，マルテを通って悲歌にいたるまでの彼の仕事は，ルーという戸口から始まった道程の上に立つものといえるのである。二人の間の感情のアンビバレンスは，緊迫した筆づかいで描写されている。

第5部は，晩年，フロイトと出会い，自ら精神分析の技術を身につけてサイコセラピストとなったルーを描き出している。自分が作家として表現しようとしていた意識下の生命力への洞察が精神分析によって得られること

を，彼女はフロイトから学んだのである。エロスの神聖な狂気を信じるルーがフロイトにひかれ，終生そのよき解説者であったことは首肯できることである。彼女は潜在意識のなかに生命の根源を，創造活動の源泉を，認めていた。その点一般の精神病理の臨床医が患者の心内の葛藤の解決法をのみそこに読みとろうとしていたのと異なるといえよう。彼女は戦争，ロシア革命への失望，夫の死，病い，ナチの擡頭といううちつづく不幸のなかで，なお生命への信頼に生きたのであった。

全体としてルーをとりまく諸群像もほどよく浮き彫りにされ，また，ペテルスブルク，ミュンヒェン，ベルリーン，パリ，ウィーンなど，それぞれに個性の強い諸都市の世紀転換期を中心とする時期の雰囲気がいきいきと描き出されていて印象的である。ただ叙述中の年代月日にあいまいになりがちなところがある。なお巻末のルーの著作目録は貴重であり，また本文中の説明によって，いまはあまり読む機会もないそれらの内容が知られて興味深い。

H. F. Peters: *Lou. Das Leben der Lou Andreas-Salomé.*

Kindler Verlag, München 1964.

Cecil Day Lewis: *The Poet's Way of Knowlege*

山本和平

「詩人の認識方法」という表題はおそらくたいていの読者の眼には先ず奇異なものに映るであろう。「詩人」と「認識」とはおよそ矛盾する観念だとわれわれの常識は承知しているからである。認識とはふつう感覚や記憶像をこえた思考にかかわるものとみられるから，詩人が認識するということは矛盾ではないか，僭称ではないかという反論が直ちにはねかえってくるわけである。

詩人の書く詩論——詩の本質論——が詩の擁護論のひびきをもつのはイギリスではロマン派の詩人たち，ワーズワスやコールリッジ以来であるが，それ以来，「詩」に対立するものは「科学」と相場はきまっている。ルイスが「詩人の認識方法」というとき，それは「科学者の認識方法」と区別しこれと対立させると同時に，「認識」なる精神のハタラキは単に科学の独占ではないこと，つまり「認識」('Knowledge' の作用面を「認識」，結果を「知識」といおう）は科学のみならず詩によっても与えられることを闡明しようとしたわけである。

本書は 1956 年 10 月 27 日，Cambridge Newnham College で行われた Henry Sidgwick Memorial Lecture である。詩人ルイスにはすでに *A Hope for Poetry* (1934), *Poetry for You* (1944), *The Poetic Image* (1947) 等の啓蒙的また専門的な評論があり，これらは単純な事例をあげて詩のさまざまな姿を解説するなかに，実に示唆にとんだ含蓄のある内容が示されている。そうした点では本書もほとんど淡々と語られながら，随所に深い洞察をふくんだ指摘にぶつかる。

T. S. Eliot にならって，詩の本質論など無意味と片附けてしまえばそれまでだが，詩が批評を含まざるを得ない現在，詩人が詩の本質を考究することはほとんど必然といってよいだろう。

今世紀にはいって I. A. Richards がその *Science and Poetry* (1926) において行った詩の擁護論は，主として新興の心理学的装置のなかで詩的経験の独自性と人生的な意義を解明し，詩と科学との機能を区別した点に特徴があるとすれば，このルイスの所論は，や